

18世紀後半期における市民劇の発達

—イギリスの場合—

佐藤俊子

i 背景

ii 悲劇：擬古典的悲劇—家庭悲劇

iii 喜劇：1750—61 Foote, Murphy, Colman ほか

1762—67 Whitehead, Bickerstaffe ほか

1768—74 Kelly, Goldsmith, Cumberland

ほか

1775—79 Sheridan

i 背景

ギリシア劇成立の背景にはポリスという異教的共同体があり、中世劇成立の背景にはキリスト教的西欧世界という統一体があった。ルネッサンス期から17世紀にかけては劇活動がそれぞれの国家に所属するようになり、そこにさまざまな相違や特色が生じてきたため、外観はいくぶん複雑になったが、それでもまだかなり明確な中心——絶対君主といったような——が存在し、その把握を容易にしてくれていた。エリザベス朝演劇とか、フランス古典主義演劇とか、王政復古朝劇と言うとき、われわれはたしかにひとつの鮮明な輪廓を思いうかべることができたと思う。

ところが18世紀に入ると演劇は突然とらえがたいものに見えてくる。さまざまな傾向が並列され、かつての演劇が保持していた明確な輪廓は失なわれ、理性と感性とがたがいに自らを主張してゆずらず、古典的かと思えばロマン的であり、悲劇と喜劇の区別さえつきかねるような状態が出現した。もちろん18世紀演劇がイギリス、フランス、ドイツと全ヨーロッパ的なスケールに波及した「市民劇」であると言ってしまえば、きわめて簡潔明瞭である。富と教養を身につけ、余裕を得た市民階級が貴族と同列に劇場の観客に加わり、しかもしだいに重要な

比重を占めるようになると、それにつれて劇作家も王侯ではなく、市民の趣向を考慮しはじめるのは当然である。しかしこのあたりから問題は徐々に複雑になってくる。

まず第一に作家の側に問題があった。演劇は小説のように市民階級の成立とともに必然的に生まれた新しいジャンルではない。演劇には、その威光が衰えたとは言え、過去にずっとしりと積みあげられたみごとな伝統や堅固な法則があり、すぐれた各種の模範があった。事実、18世紀を通じて Shakespeare が頻繁に上演され、Wycherley や Congreve の人気もいっこうに衰えず、フランス劇の翻案ものもさかんに行なわれていた。これを新しい市民のための演劇として改造するためには旧習を無視したり、法則に背を向けたり、それでいながら無意識のうちに伝統に屈したり、といったさまざまな迂回をたどらなければならず、小説のようにまっすぐに輝しい発展の一路を勇往邁進するとうようなわけにはいかなかった。そして多くの場合、改造の仕事は創造よりもはるかに困難である。事実、この時期にはすぐれたオリジナルな劇作は少ない。その意味では18世紀人である Fielding が演劇をきっぱりと断念して小説に転向したことはきわめて賢明な処置であったと言える。

第二に観客の側にも問題があった。王政復古期に Charles II の特許にもとずいて英国にはじめて誕生した二つの屋内劇場は当初はもっぱら王統派の詩人と宮廷人の独占物であったが、貴族の威力が衰え、市民階級の勢力が増大するにつれて、徐々に雑多な階層の客を収容するようになった。1760年頃の Goldsmith の報告に

よれば、劇場の客席には上演中も騒々しくさわぎだてる貧乏人から各層のブルジョアジー、開幕前にオレンジをかじったり、律儀に劇のあら筋を読んだり、会合の約束をしたりする外国人、自らを演劇の鑑定家か批評家と心得ている、そのくせ批評の初歩的原理もわきまえない虚栄に満ちた気取り屋、ボックス席で観劇中もたがいに微笑や色目をかわし合う貴族の男女らが雑居していた⁽⁹⁾。しかも数において増大する一方のブルジョアジーが実は新興階級であり、たえず変身して止まない階層であるということにも問題があった。彼らの性格も趣向も要求も常に定着せず、可能性を追い求めてたえまなく流動するところに、あるいは18世紀の矛盾も、18世紀劇の不可解な多様性も生じたのではあるまいか。

市民社会の成立後まもない18世紀前半期においては、営利を追求する市民階級の思惟方法と言うまでもなく合理主義であった。合理主義的知性は常に冷静で論理的で計算ずくで激情を欠く。かくて隠健、勤勉、義務に忠実で善良な市民の趣向は古典主義に傾いた。Popeの時代が、英文学史上、理性の時代であり、擬古典主義の時代であるのは得心のいく事実である。しかし世紀も半ばをすぎると、隠健で勤勉で義務に忠実なだけの善良な市民であることに破綻が生じてくる。市民革命をなしたとげた直後の自信や健康で肯定的な現実感や勝利の気分は彼らの新生活が落着くとともに薄らいでいく。ひたすら上昇を願い、無限を欲し、期待をつのらせるとき、突如、彼らは不安と憂鬱の狭谷を見、深い挫折感に襲われる。厳格な意識的合理性に疲れて無責任で奔放な感性を望み、月並みな気取りと文明に飽きて自由な自然を欲するようになる。しかも演劇に限ってみれば、劇場に足を向けるブルジョアジーの層が広まるにつれて、芸術的素養や訓練を積まない、したがって古典劇の峻厳や簡素を理解せず、韻文を好まず、様式の精緻などにはまったく無縁な連中が客席を占有するようになる。しかしそこから彼らは、かつての貴族芸術が理性尊重と抑制を特徴とした

のに対し、感性を特徴とする新しい市民的芸術を育成し始めていたのである。感性こそブルジョアジーの生存の基盤である個人主義や主観主義にふさわしい表現形式を生む媒体であり、おのずといかにも平民らしい告白調の暴露的な芸術を作りあげていった。こうして18世紀後半期は、前半期の古典的態度を一方に保存し続けながらも、全ヨーロッパ的に感傷主義文学が隆盛をきわめ、Rousseauの*La Nouvelle Héloïse* (『新エロイズ』, 1761)、Sternの*A Sentimental Journey* (『感傷旅行』, 1768)、Goetheの*Die Leiden des jungen Werthers* (『若きヴェルテルの悩み』, 1774)などの傑作を次々と世に送り出すのである。

第三に作家と観客、つまり供給者と需要者の中間に——これは近代以降の劇場芸術につきまとう特異な宿命であるが——劇場の問題があった。古代ギリシャの大劇場は完全な国家管理のもとにおかれていたし、中世劇には祭りごとに設けられる仮設的舞台があるのみで、しかもそれは信者の献金と労役とで支えられていた。Shakespeare時代には劇場といってもいわゆる自然発生的な簡素なものであり、商業劇場ではあっても「八百屋に投資するよりも劇場のほうがよい」といった程度の規模のものでしかなかった。もちろん太陽光線による昼間興行であり、費用のかさむ装置や道具立てもほとんどなかった。ところが王政復古朝以後、事態は一変した。まず劇場は屋内劇場となり、舞台も額縁式に変わり、楽座が設けられて演奏団体が常時加わり、衣裳・装置も一段と豪華になった。公演は夜間興行でローソクや石油燈によって舞台や客席を照らさなければならなかった。しかも18世紀は俗に言う「名優の時代」である。名高い男優や女優が幅をきかせ、彼らのある者は劇場支配人として実権をふるっていた。その上、1737年から1843年まで法令によって演劇上演用の劇場が二つに限定されると(なぜ自由主義の伸長したこの一世紀間にこうした法令が改正もされずにとり残されたのか疑問であるが)、増大するロンドンの演劇人口に対する善後策は

エプロン・ステージを取り払うか改築でもして客席を増すことだけとなり、何かと費用のかさむ大劇場の経営は安全を旨とし、営利的になる一方であった。こうして検閲令と大劇場の経営方針は演劇から危険な実験を一切閉め出したのである。一方、作家もまた、出版事情が好転し、読者層の支持を得られるようになった結果、彼らを冷遇する劇場に背を向け始めた。もはやかつてのように劇場だけが文士の働き口ではなかった。むしろ彼らの良心は無教養な劇場支配人の気まぐれに創意を左右されることががまんならなかったし、彼らの提供した作品が支配人の手で勝手に改作されたり、変形されたりすることに耐えられなかった。彼らは支配人に屈するよりも上演を断念する道を選びがちとなった。

このようにいい意味でもわるい意味でも一躍近代化した18世紀後半期——あるいは法令によって演劇が小劇場というかなり自由な発表の場を失った、1737年以降と考えてもよいと思うが——の演劇界は感傷主義に主流をうばわれ、喜劇に笑いを回復しようと努力した Goldsmith や Sheridan の功績がいかに傑出したものではあっても、時勢を変えるところまではいかなかったようである。

ii 悲 劇

擬古典的悲劇：すでに前章から見てきたように、⁽²⁾ 観客の興味はしだいに古典悲劇から遠のいてはいたものの、古典主義に対するなんらかの敬意が18世紀全体を通じて人々の心の奥底に停滞し続けたことは事実であり、したがって18世紀後半期に入っても古典的韻文劇がしばしば上演されていた。厳密に「時の一致」を守った Robert Dodsley の *Cleone* (1758)、Corneille の *Persée et Démétrius* によった Edward Young の *The Brothers* (1753)、喜劇の分野で有名な Arthur Murphy も一方で Voltaire の翻譯劇 *The Orphan of China* (1759)、*Zenobia* (1768)、*The Grecian Daughter* (1772)、*Alzuma* (1773) のような擬古典的悲劇を

書いていた。感傷喜劇作家として名高い Richard Cumberland もそのデビュー作は *The Banishment of Cicero* (1761) という古典悲劇であり、その後 Shakespeare の改作 *Timon of Athens* (1771)、*The Battle of Hastings* (1778)、*The Princess of Parma* (1778)、*The Duke of Milan* (1779)、*The Carmelite* (1784)、*The Arab* (1785) と、20年以上にもわたって blank-verse による悲劇を Drury Lane と Covent Garden の両劇場に提供した。Hugh Kelly も同様、*Clementina* (1771) で悲劇を試みている。しかし総じてあまり活気のない、不出来な擬古典的悲劇よりは、Garrick のような名優の演ずる Shakespeare の悲劇や歴史劇が人気を博していたようである。

家庭悲劇：Lillo の流れを汲む家庭悲劇には Edward Moore と David Garrick の合作散文劇 *Gamester* (1753)、「スコットランドの Shakespeare」と呼ばれた John Home の *Douglas* (1756)、Richard Cumberland の散文悲劇 *The Mysterious Husband* (1783)、Richardson の小説 *Pamela* (1740)の舞台化である Thomas Hull の *The Fatal Interview* (1782)、などがあり、擬古典的悲劇よりはるかに成功をおさめてはいたものの、決して優勢とは言えない。やはりブルジョアジーのメガホンとなり得る形式は元来貴族的な悲劇よりもともと庶民的な喜劇であり、高貴な悲劇になじめない彼らは感傷喜劇という新分野を開拓し、そこで彼らの笑いや涙も同時に処理しようとしたかに見える。

iii 喜 劇

検閲令の施行以来、激烈な風刺劇も Fielding も劇界から姿を消すと、悲劇・喜劇の両分野に市民道徳と教訓主義に身を固めた感傷主義が公然と幅をきかすようになった。しかしそれがしばしば型にはまった、涙っぽい勸善懲悪劇に流れることに対して、批判がまったくなかったわけではない。むしろ18世紀後半期は、喜劇に関する限り、comic と sentimental の闘争であったと言える。もちろん観衆の好みは sentimental

に勝利をもたらすのであるが、この闘争は劇作家、劇場、劇場支配人、観客、その他さまざまな要素がからみ合いながら展開されていく。

1750年—61：これは Samuel Foote, Arthur Murphy, George Colman, the Elder らが出て、喜劇精神をもちたてた時期である。

Samuel Foote (1720—77) は1737年から40年までの3年間、Oxford の Worcester College に学び、その後ロンドンに出て畜財を使い果たすと劇界に入り、1744年2月6日、Haymarket における *Othello* の上演でデビューした。1747年には Haymarket で “*Diversions of the Morning*” および “*Tea at 6:30*” と題して一連の entertainment を企画し、彼自ら社会・人物風刺に富む脚本も書き、傑出した mimicry (ものまね) をもって、まず俳優として名声をあげた。彼の最初の本格的喜劇は *The Knights* (1749) で、Haymarket で上演された。その後、*Taste* (1752) を Drury Lane, *The Englishman in Paris* (1753) を Covent Garden, 再演ものであるが *The Knights* (1754) を Drury Lane, *The Englishman in Paris* の続篇、*The Englishman returned from Paris* (1756) を Covent Garden, *The Author* (1757) を Drury Lane, といった具合に喜劇を次々と二つの大劇場に提供し、かつ自ら俳優として自作の登場人物を演じ、名演技を披露した。

アイルランド生れの Arthur Murphy (1727—1805) はフランスのサン・オーメル (St. Omer) の English College で教育を受け、イギリスに戻ってから法律を志し、1757年に Lincoln's Inn に入学した。以来彼は演劇に興味を寄せ、劇作に多くの時間を費しながらも、1788年に弁護士業を引退するまでは法律に関係し続ける。Murphy の劇壇登場は Lincoln's Inn に入る前年の1756年1月2日、Drury Lane における *The Apprentice* という笑劇の上演をもってであった。これについて彼が1761年頃までに Drury Lane に提供した劇作は *The Upholsterer* (1758), *The Orphan of China* (1759), *The Way to Keep Him* (1760)

All in the Wrong (1761), *The Old Maid* (1761), *The Citizen* (1761) などであるが、すでに触れた *The Orphan of China* が悲劇であることを除くと、すべて感傷に染まらない明朗な喜劇である。

George Colman (1732—94) は外交官を父にフィレンツェに生れた。イギリスに戻って教育を受け、Westminster から Oxford の Christ Church へ進み、さらに Lincoln's Inn に学んだ。1755年には弁護士免許を得たが、1758年頃、David Garrick と親しくなり、まもなく劇壇と関係するようになった。彼の最初の劇作は感傷主義を攻撃した喜劇 *Polly Honeycombe* で、1760年12月5日、もちろん親友 Garrick の経営する Drury Lane で上演された。第2作 *The Jealous Wife* (1761) も Fielding の *Tom Jones* (1749) の筋書を一部借用したもので明かるい笑いにみちた喜劇である。Colman は Fielding と Goldsmith の中間にあって、感傷喜劇に抵抗しながら comic spirit の表現に尽力した劇作家である。

このほか1740年から劇界に住みつき、権力と名声を欲しいままにしていた David Garrick が1750年代の終わり頃に *The Male Coquette* (1757), *The Gamesters* (1757), *The Guardian* (1759) など、comic spirit にあふれた喜劇や笑劇を発表していた。こうして眺めてくれば、1760年前後はいわば感傷反対派とも呼べる巨匠たちが出そろい、あたかも comic の勝利の観を呈したと言える。

1762—67：1762年は一般に Sentimental Comedy 復活の年と言われる。まずこの年に、1717年から6年間ロンドンに滞在し、英国婦人と結婚、Addison, Steele, Cibber らと交わって感傷喜劇をフランスへ持ち帰り、1727年に *Le Philosophe Marié* を発表して以来、30篇におよぶ感傷喜劇を書いた Phillipe Néricault Destouches の作品が *The Comic Theatre* と題して、イギリスに逆輸入された。そのほかにもイギリスの影響から脱皮してフランス劇に新しいジャンル Comédie larmoyante (催涙喜

劇)を確立した La Chaussée (1692—1754)、優雅でロマネスクな対話を通して *Le jeu de l'amour et du hasard* (1730) や *Les fausses confidences* のような恋のたわむれを描いた Marivaux (1688—1763)、その親友の Fontenelle (1657—1757)、Beaumarchais (1732—99) らの影響がイギリスに徐々に押し寄せつつあった。1762年2月10日、Sentimental Comedy 復活を導いた最初の喜劇である William Whitehead⁽³⁾ の *The School for Lovers* が Drury Lane で上演されたが、これは Fontenelle の *Le Testament* の筋書と Marivaux のスタイルで書かれていた。Whitehead がそのプロローグで述べている喜劇の目的は明らかにフランスの催涙喜劇の影響を示している。

Plain comedy to-night, with strokes refined,
Would catch the coyest features of the mind;
Would play politely with your hopes and fears,
And sometimes smiles provoke, and sometimes
tears.

(今夜の粗末な喜劇は、洗練された筆づかいで、心の内奥の様相をとらえるでしょう。皆さまの期待と恐れのなかで優雅に演じられ、ときには微笑を、ときには涙を誘うでしょう。)

また1762年から Isaac Bickerstaffe (1735—87)の活躍が始った。彼の功績は主として Sentimental Opera の分野にある。すでに感傷主義は Cibber の頃から劇に音楽を導入し、Musical Comedy ないしは Comic Opera と呼ばれるものの隆盛をうながしていたが、この傾向はさらに二つの特許劇場が前狂言、劇の後の切り狂言、間の狂言として喜歌劇を併演する習慣を確立したため、いっそう助長された。Bickerstaffe は1735年頃アイルランドに生まれたが、その後ロンドンへ出て Dr. Johnson のサークルの一員になり、1760年11月28日、Covent Garden における *Thomas and Sally, or, The Sailor's Return* の上演ではじめて喜歌劇を試みたが、1762年の *Love in a Village* では大当たりをとった。これに続く *The Maid of the Mill* (1765) は1740年の刊行以来、非常な人気を博した感傷主義の典型的作品 *Pamela*⁽⁴⁾ から筋を借

用し、大成功をおさめた喜歌劇である。このほかに彼は、1772年に反逆罪の嫌疑を受けて国外へ追われるまでのおよそ10年間、*Daphne and Amintor* (1765)、*Love in the City* (1767)、*Lionel and Clarissa* (1768)、*The Padlock* (1768)、*The Captive* (1769)、*The School for Fathers* (1770) のような喜歌劇、*Tartuffe* の翻案劇 *The Hypocrite* (1768) のような喜劇、*The Absent Man* (1768) のような笑劇など、多くの作品を舞台のために書いた。彼の影響下に感傷派の Richard Cumberland も彼の本領である感傷喜劇の発表 (1769) に先立って *The Sammer's Tale* (1765)、*Amelia and Henry* (1768) という二つの喜歌劇を上演している。

1766年2月20日には、劇界の二大権力とも言うべき Garrick と Colman が合作 *The Clandestine Marriage* を Drury Lane で上演した。Hogarth⁽⁵⁾ の風刺画 *Marriage-à-la-mode* にヒントを得て書かれたものであるが、豪商の娘と貴族の息子の結婚を中心テーマとするこの喜劇には多分に感傷主義が目立つ。これを Berbaum は “a surrender to the popular taste”⁽⁶⁾ (通俗趣味への降服) であると注目している。

David Garrick (1717—79) のデビューは笑劇 *Lethe* (1740) の作者としてであったが、彼の名声は *Richard III* の主演 (1741年10月) 以来、舞台史上最大の俳優として一躍高まった。Shakespeare の多くの劇に主演し、彼流儀の「自然な演技」⁽⁷⁾ を確立する一方、Shakespeare の改作者としても名をあげた。また1747年からは Drury Lane の管理者の一人となり、劇場経営にも乗り出した。また1750年代から60年代にかけては *The Gamesters* (1757)、*The Guardian* (1759)、Whitehead の *The School for Lovers* の感傷を笑いとばした *The Farmer's Return to London* (1762) のような comic な芝居を書いていた。ところがこうした彼も *The Clandestine Marriage* から感傷主義へ急カーブしていく。合作者の Colman も1763年の *The Deuce is in Him* までは感傷反対派の陣

営にあったが、*The Clandestine Marriage* で感傷主義と妥協して以来、翌1767年にも引き続き Voltaire の催涙喜劇 *L'Ecoisaise* (1760) を模倣した *The English Merchant* を発表している。こうした彼の態度変更の背後には彼が1767年から Covent Garden という大劇場の管理者の一人に加わったという事情もからんで(8)いると思われる。1747年以来、Drury Lane の支配人の地位にあった Garrick とともに、この二人の劇作家は Comic Muse に仕える心情を抱きながらも、作家兼劇場支配人という微妙な立場に立たされたとき、Berbaum の言うように、徐々に強まってきた公衆の感傷趣味に屈したのだと見ていいかもしれない。また同年 Samuel Foote もまた Haymarket の小劇場の支配人となっている。

1768—74：まず1768年のロンドンの演劇界は感傷派の Hugh Kelly と感傷反対派の Goldsmith の対決で幕を開ける。

Hugh Kelly (1739—77) はダブリンの酒場の主人の息子で、酒場へ出入りする俳優たちと交って成長したらしい。1760年、ロンドンへ出た彼はペンで生計を立てようと、雑誌や新聞に雑文を投稿したり、*Memoirs of a Magdalen* と題する小説の出版を試みたりしていたが、1767年9月、彼の最初の喜劇 *False Delicacy* を書きあげ、Garrick にわたした。Garrick は Kelly の才を認め、これを1768年1月23日、Drury Lane で上演し、最初のシーズンに20回以上も続演し、年内に一万部ものコピーを売るといふ大成功をおさめた。彼にはほかに四篇の喜劇がある。high comedy と sentimental comedy の混合物 *A Word to the Wise* (1770)、Goldsmith に対する反論とも言うべき *The School for Wives* (1773)、フランスの作家 Marmontel の翻案劇 *The Romance of an Hour* (1774)、最後の喜劇 *The Man of Reason* (1776)。

Oliver Goldsmith (1728—74) はアイルランドの貧しい牧師の家に次男として生まれた。1745年ダブリンの Trinity College に特待免

費生として入学、1750年に卒業した。聖職を志して果さず、エジンバラ、ライデン等の大学で医学を修める。1754年から2年間、ヨーロッパ各地を放浪、1756年2月1日、27歳でロンドンに戻った彼は貧困の極にあった。1757年12月、義兄 Damel Hodson 宛ての手紙に彼は

You may easily imagine what difficulties I had to encounter, left as I was without friends, recommendations, money, or impudence; and that in a country where my being born an Irishman was sufficient to keep me unemployed.

(友もなく、紹介状もなく、金もなく、かと言って厚かましきもなく取り残された小生がどのような困難に遭遇しなければならなかったか容易に察せられるでしょう。しかもこの国では小生がアイルランド人であるというだけで職にありつけない十分な理由になるのです。)

と書き送っている。しかし彼の生来の楽観癖 (a knack of hoping) と「激情を欠いた、用心深い安らぎ」(tranquility of dispassionate prudence)⁽⁹⁾を嫌う彼の情熱は貧しい彼を常に明かるく支え、彼の温かい humour や wit をそこなうことなく保持するのである。ともあれロンドンに到着した彼は医者を開業したり、学校の教師をしたり、雑文を寄稿したりしながら生きのび、ようやく1759年4月、彼の最初の重要な作である *An Inquiry into the Present State of Polite Learning in Europe* を出版した。これは12章から成る論文集であるが、その第10章“Of the Stage”は Cibber の *Provoked Husband* (1728) 以来、すぐれた新作劇は皆無であると劇界の沈滞ぶりを嘆き、また劇作が上演に先立って支配人、検閲官の審査を受けなければならず、さらに何度も修正されて、ほとんど死物と化してからやっと観衆の眼前にたどりつく、という劇作上演上の手続きの不合理を指摘するなど、鋭い批判を含むもので、劇壇の独裁者 David Garrick をすっかり怒らせてしまう結果となった。二人の不仲は後まで尾を引き、Goldsmith の喜劇の上演の障害となる。また1759年の10月から11月にかけて出版者 Wilkie の発行した *The Bee* という

週刊紙を Goldsmith はひとりで担当したのであるが、その第1号に“Remarks on Our Theatres”, 第2号に“On Our Theatres”と題して劇評をのせている。ついで1762年、書簡形式によるエッセイ集 *The Citizen of the World* が刊行されたが、その“Letters 21”と“Letters 79”は当時の観客と悲劇を批判したものであった。1765年の *Essays* の中にも“Adventure of a Strolling Player”および“Sentimental Comedy”と題する二つの劇評が入っている。heroic couplet を用いた長詩 *The Traveller* (1764)、小説 *The Vicar of Wakefield* (1766) で文名をあげ、*The Vicar* を出版した1766年、Goldsmith はいよいよ彼の演劇観を作品に反映すべく、喜劇 *The Good-Natured Man* に着手した。1767年の春、この喜劇は完成した。Johnson はCibberの *Provoked Husband* 以来の名作であると称賛し、Prologue を書くことを約束した。もともと Goldsmith は *An Inquiry* 以来気まずい仲の Garrick に上演を依頼するつもりはなかったのであるが、折悪く Covent Garden 劇場が Rich の死後、管理者の交替をめぐる混乱のさなかであったため、やむなく Drury Lane の Garrick を訪れた。Garrick は上演を一応承諾したものの、劇場主の立場から、あるいは *An Inquiry* 以来の恨みもあったかもしれないが、Goldsmith の最も嫌悪した作品の訂正を申し出た。交渉は烈しい論争をもって決裂した。そうこうするうちに Colman が Covent Garden の支配人の地位に落ちついた。*The Clandestine Marriage* (1766) の合作を通じて、それまでは親友の仲にあった Garrick と Colman の間にも不平や対抗意識が鬱積していたのであるが、それが1767年 Colman が Covent Garden の支配人になったことで、二人ははっきりと競争者の立場に立つこととなった。手始めに Colman は Garrick の投げ出した Goldsmith の喜劇の上演を引き受けた。これに対して Garrick は報復の手を打ち、二流の作家 Hugh Kelly の感傷喜劇をあえて取りあげ、上演を成

功させるために莫大な費用を投じて舞台を華麗に飾りたて、Garrick 自身で Prologue と Epilogue を書き、会話の一部を修正するなどの手を加え、1768年1月23日、初日の蓋をあけた。それから6日後、1768年1月29日、競争相手の輝かしい成功を眺めながら、作者も支配人も俳優も意気あがらぬままに *The Good-Natured Man* が上演された。喜劇俳優 Ned Shuter と Miss Walford だけは名演技で芝居を引き立てたが、結局上演は失敗に終わった。Goldsmith はその夜の悲しみを次のように述べている。

…when all were gone except Johnson here, I burst out a-crying, and even swore that I would never write again.

(人々が去り、ジョンソンと二人きりになったとき、私は思わず泣きぐずれ、もう決して二度と芝居は書かないとさえ誓った。)⁽¹⁰⁾

しかし生来お人好しで楽観的な彼は5年後、*Essay on the Theatre; or, A Comparison between Sentimental and Laughing Comedy* (1773) を *Westminster Magazine* 誌上に発表、“weeping sentimental comedy”に対して“laughing and even low comedy”擁護の立場を明瞭にした後、第二の喜劇 *She Stoops to Conquer; or, The Mistakes of a Night* を1773年3月15日、Covent Garden で上演することになる。ただしこの喜劇が完成されたのは1771年9月頃であったが、前作の失敗の事情もあり、上演にこぎつけるまでに前作以上の迂余曲折があったらしい。Garrick は劇場支配人として、sentimental でない Goldsmith の喜劇の上演を拒絶したものの、その頃さまざまな社交機関を通じて親密になっていた友人 Goldsmith のために反感傷派讃美の Prologue を書いた。予想に反してこの上演は大成功をおさめた。最大の尽力者である Johnson は

I know of no comedy for many years that has so much exhilarated an audience; that has answered so much the great end of comedy—making an audience merry.

(過去幾年もの間、これほど観客の気分を浮き立た

せた喜劇を私は知らない、この劇は喜劇の偉大な目的すなわち観客を陽気にするという目的に十分かなうものであった。⁽¹¹⁾

と述べている。しかし支配人との長期間にわたる交渉や俳優たちのうるさい注文に疲れ果てた作者は公演終了後、友人の Cradock に宛てて、“I am very sick of the stage.”（私は舞台にはすっかりいや気がさしました。）と書き送っている。この上演の成功から12箇月後、さまざまな計画を胸に描きながら、Goldsmith はわずか45歳で他界した（1774年4月4日）。それにしても作者自身が経験したまちがいを堂々と喜劇の材料に選び、ロンドンの社交界ではなく、古ぼけた田舎屋敷を舞台に設定し、無教育な連中を相手に上気嫌で酒を飲み、自作の歌を歌う Tony や bashful で impudent にはどうしてもなれない Young Marlow, お人好しで親しみやすい Mr. Hardcastle など、主要な登場人物に作者自身の面影をしのばせ、居酒屋の群集やひどい俗語を話し、客扱いも知らない召使いたちを登場させた喜劇が成功をおさめたということは市民劇の成熟を示すものとして特筆に値する事実である。それは5年前、Kelly の *False Delicacy* が Goldsmith の *The Good-Natured Man* を完全に征した時点では決して考えられないことであった。わずかに二作ではあるが彼が示した方向はやがて Sheridan に受け継がれていく。

しかしこうした“genuine comedy”（真正喜劇）の上演が成功するという事件があったとはいふものの、感傷派の勢力は依然として衰えなかった。Goldsmith の劇壇登場の周辺にはすでに触れた Hugh Kelly の *False Delicacy* (1768) や喜歌劇の王 Bickerstaffe の代表的傑作 *Lionel and Clarissa* (1768) があつたほか、二つの音楽喜劇 *The Summer's Tale* (1765) と *America and Henry* (1768) で地固めをした Richard Cumberland が *The Brothers* の上演によって感傷喜劇の分野での活動を本格的に開始していた。

Richard Cumberland (1732—1811) は Hugh

Kelly とともに18世紀後半期の感傷派を代表する作家であるが、その劇壇歴は Kelly よりもはるかに長い。有名な古典学者 Richard Bentley の孫であり、Cambridge の Trinity College の学寮長の息子である彼は Westminster, Cambridge の Trinity College に学び、優秀な成績で卒業した。商務省 (Board of Trade) とアメリカ植民地関係の仕事の秘書官を務め、1780年から81年までスペイン大使として赴任したこともある。劇壇とは1761年、悲劇 *The Banishment of Cicero* でデビューして以来、彼の最後の喜劇 *The Widow's Only Son* が1810年上演されるまで、およそ50年にわたって関係し、40篇ほどの芝居を書いた。もちろん彼の本領は感傷喜劇にあり、*The Brothers* (1769)、*The West Indian* (1771)、*The Fashionable Lover* (1772)、*The Choleric Man* (1774) など、1760年代の終わりから70年代にかけて感傷劇の全盛時代にすぐれた作品が多い。

このほか特異な活躍を見せた作家には Samuel Foote がいる。彼は1766年7月、それまでは音楽もののみを上演していた Haymarket の小劇場のために演劇の Summer Licence (夏期上演許可証) を手に入れ、さっそく1720年の旧館を取り払って新劇場を建造、1767年開館した。その後1777年までの10年間、彼はこの小劇場の支配人をつとめるかたわら、多くの新作喜劇を発表した。1767年以降の Foote の作には *The Devil upon Two Sticks* (1768)、*The Lame Lover* (1770)、*The Maid of Bath* (1771)、*The Nobob* (1772)、*The Bankrupt* (1773)、*The Cozeners* (1774) などがある。

1775—79: 18世紀のイギリス演劇で現在もなお舞台に生き続ける三大傑作として Goldsmith の *She Stoops to Conquer* と Sheridan の *The Rivals* および *The School for Scandal* がよくあげられる。この二人の作家の劇壇生活はきわめて短かく、劇作も Goldsmith 2篇、Sheridan 7篇と決して多くはないのであるが、それにもかかわらず、彼らは全体としては不毛

と嘆かれる18世紀のイギリス演劇を救う唯一のオアシスであり、重要な存在なのである。そこでこの章の終わりにこの三大傑作中の二作の作者である Sheridan に触れておきたいと思う。

Richard Brinsley Sheridan (1751—1816) は Swift の友人 Dr. Thomas Sheridan の孫であり、アイルランドの俳優と女流作家の息子である。両親は1762年英本土に住みつき、Richard を Harrow 校へ入学させた。彼は1770年バースに移り、*Bath Chronicle* に詩を寄稿し、文筆生活を始めた。1772年、“Maid of Bath”として名高かった美しい歌姫 Elizabeth Linley と恋に落ち、パリへ逃れた。恋がたきと二度決闘、1773年結婚した。1774年の夏、彼は喜劇 *The Rivals* を書き、1775年1月17日、Covent Garden でこれを上演した。この成功に力を得た若い Sheridan は同年のうちに笑劇 *St. Patrick's Day* と喜歌劇 *Duenna* をいづれも Covent Garden で上演した。その実

力が長い間劇界に君臨した Garrick の目にとまり、彼の引退に伴い、Sheridan が Drury Lane の支配人の地位を引き継ぐこととなる。こうして Sheridan は1776年から78年政界入りするまで大劇場の経営に手腕をふるい、さらに名目上は1809年まで支配人として留まって劇場との関係を保ち、彼の政界での活躍の財源とした。Drury Lane の管理者となった Sheridan はさっそく自分の劇場のために、Vanbrugh の *Relapse* の改作、*A Trip to Scarborough* (1777)、*The School for Scandal* (1777)、*The Camp, A Musical Entertainment* (1778)、*The Critic* (1779) を書き上げた。その後1799年に Kotzebue のドイツ劇の改作悲劇 *Pizarro* を上演しているのを例外とすれば、Sheridan の劇界での活躍は1775年から79年までの5年間にすぎないのであるが⁽¹⁹⁾、*The Rivals* および *The School for Scandal* の二作をもって、彼の名は演劇史上に輝いているのである。

上演年表

1752年	1月11日	Samuel Foote: <i>Taste</i> (C.)
1752年	2日17日	Philip Francis: <i>Eugenia</i> (T.)
1253年	2月7日	Edward Moore and David Garrick: <i>The Gamester</i> (T.)
1753年	3月24日	Samuel Foote: <i>The Englishman in Paris</i> (C.)
1756年	1月2日	Arthur Murphy: <i>The Apprentice</i> (F.)
1756年	2月3日	Samuel Foote: <i>The Englishman returned from Paris</i> (F.)
1756年	3月14日	John Home: <i>Douglas</i> (T.)
1757年	2月5日	Samuel Foote: <i>The Author</i> (C.)
1757年	3月14日	David Garrick: <i>The Gamesters</i> (C.)
1758年	3月20日	Arthur Murphy: <i>The Upholsterer</i> (F.)
1759年	2月3日	David Garrick: <i>The Guardian</i> (F.)
1759年	12月12日	Charles Macklin: <i>Love à la Mode</i> (C.)
1760年	1月24日	Arthur Murphy: <i>The Way to Keep Him</i> (C.)
1760年	6月28日	Samuel Foote: <i>The Minor</i> (C.)
1760年	12月5日	George Colman: <i>Polly Honeycombe</i> (F.)
1761年	2月12日	George Colman: <i>The Jealous Wife</i> (C.)
1761年	4月25日	Joseph Reed: <i>The Register Office</i> (C.)
1761年	6月15日	Arthur Murphy: <i>All in the Wrong</i> (C.)
1761年	7月2日	Arthur Murphy: <i>The Old Maid</i> (C.)
1761年	7月2日	Arthur Murphy: <i>The Citizen</i> (F.)
1762年	1月12日	Samuel Foote: <i>The Lyar</i> (C.)
1762年	2月10日	William Whitehead: <i>The School for Lovers</i> (C.)
1762年	3月20日	David Garrick: <i>The Farmer's Return to London</i> (Int.)

1762年	8月30日	Samuel Foote: <i>The Orators</i> (C.)
1762年	12月8日	Lsaac Bickerstaffe: <i>Love in a Village</i> (C.O.)
1763年	2月3日	Mrs. Frances Sheridan: <i>The Discovery</i> (C.)
1763年	6月20日	Samuel Foote: <i>The Mayor of Garret</i> (C.)
1763年	11月4日	George Colman: <i>The Deuce is in Him</i> (F.)
1763年	12月10日	Mrs. Frances Sheridan: <i>The Dupe</i> (C.)
1764年	1月9日	Arthur Murphy: <i>No One's Enemy but his Own</i> (C.)
1764年	1月9日	Arthur Murphy: <i>What We Must All Come To</i> (C.)
1764年	6月26日	Samuel Foote: <i>The Patron</i> (C.)
1765年	1月31日	Isaac Bickerstaffe: <i>The Maid of the Mill</i> (C.O.)
1765年	6月10日	Samuel Foote: <i>The Commissary</i> (C.)
1765年	10月8日	Isaac Bickerstaffe: <i>Daphne and Amintor</i> (C.O.)
1765年	12月6日	Richard Cumberland: <i>The Summer's Tale</i> (C.O.)
1766年	1月9日	Mrs. Elizabeth Griffith: <i>The Double Mistake</i> (C.)
1766年	2月20日	Colman and Garrick: <i>The Clandestin Marriage</i> (C.)
1767年	1月10日	Arthur Murphy: <i>The School for Guardians</i> (C.)
1767年	2月21日	George Colman: <i>The English Merchant</i> (C.)
1767年	2月21日	Isaac Bickerstaffe: <i>Love in the City</i> (C.O.)
1767年	11月7日	George Colman: <i>The Oxonian in Town</i> (F.)
1767年	12月5日	William Kenrick: <i>The Widow'd Wife</i> (C.)
1768年	1月23日	Hugh Kelly: <i>False Delicacy</i> (C.)
1768年	1月29日	Goldsmith: <i>The Good-Natured Man</i> (C.)
1768年	2月25日	Isaac Bickerstaffe; <i>Lionel and Clarissa</i> (C.O.)
1768年	2月27日	Arthur Murphy: <i>Zenobia</i> (T.)
1768年	4月12日	Richard Cumberland; <i>Ameria and Henry</i> (C.O.)
1768年	5月30日	Samuel Foote: <i>The Devil upon Two Sticks</i> (C.)
1768年	5月	Abraham Portal: <i>The Indiscreet Lover</i> (C.)
1769年	1月14日	Joseph Reed: <i>Tom Jones</i> (C.O.)
1769年	2月4日	Mrs. Griffith: <i>The School for Rakes</i> (C.)
1769年	10月7日	George Colman: <i>Man and Wife</i> (F.)
1769年	12月2日	Richard Cumberland: <i>The Brothers</i> (C.)
1770年	1月6日	Whitehead: <i>A Trip to Scotland</i> (F.)
1770年	3月3日	Hugh Kelly: <i>A Word to the Wise</i> (C.)
1770年	6月22日	Samuel Foote: <i>The Lane Lover</i> (C.)
1771年	1月19日	Richard Cumberland: <i>The West Indian</i> (C.)
1771年	6月26日	Samuel Foote: <i>The Maid of Bath</i> (C.)
1772年	1月20日	Richard Cumberland: <i>The Fashionable Lover</i> (C.)
1772年	3月9日	Mrs. Griffith: <i>A Wife in the Right</i> (C.)
1772年	6月29日	Samuel Foote: <i>The Nobob</i> (C.)
1772年	12月8日	William O'Brien: <i>The Duel</i> (D.)
1772年	10月23日	David Garrick: <i>The Irish Widow</i> (C.)
1773年	3月15日	Goldsmith: <i>She Stoops to Conquer</i> (C.)
1773年	7月21日	Samuel Foote: <i>The Bankrupt</i> (C.)
1773年	9月	Robert Hitchcock: <i>The Macaroni</i> (C.)
1773年	11月2日	Charles Dibdin: <i>The Deserter</i> (Int.)
1773年	12月11日	Hugh Kelly: <i>The School for Wives</i> (C.)
1774年	1月29日	George Colman: <i>The Man of Business</i> (C.)
1774年	7月15日	Samuel Foote: <i>The Cozeners</i> (C.)
1774年	11月5日	John Burgogne: <i>The Maid of the Oaks</i> (C.O.)
1774年	12月19日	Richard Cumberland: <i>The Choleric Man</i> (C.)

1775年	1月17日	R. B. Sheridan: <i>The Rivals</i> (C.)
1775年	3月18日	David Garrick: <i>Bon Ton</i> (F.)
1775年	9月23日	David Garrick: <i>The Theatrical Candidates</i> (O.F.)
1776年	2月15日	Mrs. Hannah Cowley: <i>The Runaway</i> (C.)
1777年	2月22日	Arthur Murphy: <i>Know Your Own Mind</i> (C.)
1777年	5月8日	R.B. Sheridan: <i>The School for Scandal</i> (C.)
1779年	10月30日	R.B. Sheridan: <i>The Critic</i>

* なお作品のあとのかっこ内の省略文字は下記のように演劇のタイプを示すものである。

T. Tragedy C. Comedy F. Farce C.O. Comic Opera O.F. Operatic Farce
D. Drama Int. Interlude

注

- (1) cf. Oliver Goldsmith: *The Citizen of the World* (1762) Letters XXI "The Chinese goes to see a Play"
- (2) cf. 拙稿「18世紀前半期のイギリスにおける舞台の形成」北星短大『紀要』第15号 pp. 157—166 所載
- (3) William Whitehead (1715—85)はすでに2編の悲劇 *The Roman Father* (1750)および *Cræusa, Queen of Athens* (1754) の上演に成功し、1757年には Cibber の後を継いで桂冠詩人 (poet laureate) に挙げられた詩人である。
- (4) *Pamela* は言うまでもなく、*Virtue Rewarded* という副題を付せられた Samuel Richardson の感傷小説である。当時の市民の感情に訴える多くの要素を持ち、刊行 (1740年) と同時に非常な人気を博し、さまざまな影響をまきちらした作である。
- (5) William Hogarth (1697—1764): イギリスの風刺画家。とりわけ18世紀前半期の社会、庶民生活を風刺的に描写したことで注目される。1745年の作品 *Marriage à la Mode* は6枚続きの油絵で、親たちの打算ずくで結婚させられた若夫婦の悲劇が描かれている。現在はロンドンの Tate Gallery に保存されている。
- (6) Ernest Bernbaum: *The Drama of Sensibility*, p. 218
- (7) David Garrick には劇作家として、Shakespeare 劇の改作者として、あるいは劇場支配人として多くの功績があるが、彼の名声はなによりも彼の俳優としての素質によるものであり、彼に関する記憶はその数多くの名演技に由来していた。そしてその名演技の秘密は彼が Resseau ちのとなえた「自然に帰れ」の精神をその演技に取り入れたことにあった。その演技法は Noverre のパレエ・ダクシオンを通じてフランスの演劇界に大きな影響をもたらした。
- (8) この頃の大劇場の管理状態を眺めてみると、

Drury Lane は1747年から76年まで Garrick の管理下にあり、1776年から1809年までは Sheridan が名目上は支配人の地位にあったが、彼が政界入りした後、1788年以降は J. P. Kemble が実権者であった。1791年6月4日、Drury Lane の旧劇場は取りこぼされ、その間劇団は Haymarket の小劇場で上演を続行し、1794年3月12日新 Drury Lane が開設された。

一方、Covent Garden は1732年から61年まで John Rich が実権をふるい、その後 Bencroft, John Beard に引き継がれたが、1767年から Thomas Harris, John Rutherford, George Colman, William Powell の共同経営に移り、この状態は1777年、Colman が Covent Garden から抜けて Haymarket の小劇場に移るまで続いた。1782年に劇場改築、1792年から93年にかけてのシーズンにはさらに劇場は拡張された。

- (9) cf. Goldsmithは *An Inquiry* の第8章に "I would compare the man whose youth has been passed in the tranquility of dispassionate prudence to liquors which never ferment, and, consequently, continue always muddy. Passions may raise a commotion in the youthful breast, but they disturb only to refine it." (激情を欠いた用心深い安らぎのうちにその青春時代を送った人を、私はかつて一度も発酵したことのない、したがっていつも濁っている酒にたとえたい。激情は若者の心を動揺させはするが、しかしそのように心を乱すのも結局は心をいっそう純化するためのなのである。) と書いている。
- (10) Washington Irving: *Oliver Goldsmith*, p. 141
- (11) *Ibid.*, p. 216
- (12) *Ibid.*, p. 215
- (13) この後 Sheridan は1778年、29歳で政界入り、Whig 党から出て議員となり、30年政界で活躍、外務次官にもなった。1809年に彼の財源であった Dury Lane の劇場が焼失、晩年は不幸であった。1816年、65歳で死去。